



第2章

ボランティア育成

第1節 千代田区の災害に関するウィキペディア記事執筆ワークショップ

谷島 貫太（二松学舎大学 文学部）

1 はじめに

「ウィキペディアタウン」という名称で知られるワークショップがある。これは、オンライン百科事典 Wikipedia を活用し、地域の文化財や歴史的な名所を対象に、参加者が共同で記事を執筆・編集する試みである。実施方法にはいくつかのバリエーションがあるものの、多くの場合、街を実際に歩いて現地の様子を観察・取材し、さらに文献資料を参照しながら記事を作成するという流れで進められる。このプロセスを通じて、取り上げる対象への理解が深まり、学びを得ることができるだけでなく、自らが執筆した内容が Wikipedia 上で公開されることで、その対象に対する愛着や責任感が芽生えるという効果も期待できる。その他にも多くの利点があり、ウィキペディアタウンは総合的な学習の機会として注目されてきた。コロナ禍以前には、日本各地ではほぼ毎週のようにこのワークショップが開催されていた。

二松学舎大学文学部都市文化デザイン学科の谷島貫太ゼミでは、2024年度千代田学の研究プロジェクト「大規模災害時における学生ボランティアの育成とネットワーク化」に関連し、「災害」をテーマにしたウィキペディアタウンを実施した。千代田区における災害関連のトピックについて Wikipedia の記事を執筆することで、防災や災害の歴史に関する学習の機会を創出することが目的である。本章では、2025年1月19日に行われたワークショップの実施内容について報告する。

1.1 ゼミとウィキペディアタウン

谷島ゼミでは、2018年度からゼミ活動の一環としてウィキペディアタウンを継続的に実施してきた。今年度の活動について報告する前に、まずはこれまでの経緯を簡単に整理しておく。

地域の文化財に関する高品質なウィキペディア記事を作成するには、多様なスキルが求められる。文献を精読し、重要な情報を適切に抽出し、対象に応じたバランスの取れた記事構成を考案し、簡潔かつ正確な文章を書く能力が必要となる。これらのスキルは、大学生が学びを深める上でも不可欠なものだ。それに加えて、記事に掲載する写真を撮影し、それをウィキメディア・コモンズにアップロードしてウィキペディアの記事に組み込むには、一定のITリテラシーが求められる。また、著作権に関する基礎的な知識を身につけておくことも欠かせない。さらに、大学の周辺地域にある文化財を取り上げることで、その地域に関する知識を深めることができるだけでなく、ワークショップへの一般参加を可能にすれば、地域住民との交流の機会も生まれる。

現代の学生にとって、ウィキペディアは学習の過程で避けて通れない存在だ。知識の流通インフラとして機能しているウィキペディアに対して、単に使用を禁止するのではなく、どのように向き合うべきかを考えるリテラシーを身につけることが重要となる。実際に記事執筆のプロセスを経験することで、ウィキペディアを適切に活用するための基本的なリテラシーを学ぶことができる。ウィキペディアタウンは、こうした総合的な学びの場として機能するのである。

ただし、ウィキペディアタウンに参加するだけでなく、主催や運営に携わる場合には、また別の貴重な経験を積む機会となる。運営側の立場では、まずワークショップのテーマを決定することから始めなければならない。そのためには、対象となる地域について十分に調査する必要があり、準備の段階で現地を歩いて回ったり、図書館で関連資料を調べたりする作業が求められる。また、参加者を募るための広報活動も重要であり、その際にはワークショップの意義を適切に説明できることが求められる。さらに、地域住民の協力を得ようとするならば、自然と地域とのつながりが生まれてくる。谷島ゼミでは、単にウィキペディアタウンに参加するだけでなく、その企画・運営を学生自らが担うことで、地域の情報発信と地域との関わりを主体的に生み出す機会として位置づけてきた。

2 災害とウィキペディアタウン

二松学舎大学文学部都市文化デザイン学科の谷島貫太ゼミでは、2018年度よりウィキペディアタウンをゼミ活動の一環として実施してきた。しかし、2020年度以降は新型コロナウイルス感染拡大の影響により、一時休止を余儀なくされた。2022年度に活動を再開し、「災害」をテーマにしたウィキペディアタウンを開催することとなった。

ウィキペディアタウンを実施するにあたっては、執筆対象となるトピックの選定が重要である。選定に際しては、(1) まだウィキペディアに記事が存在しないこと、(2) 独立した記事として取り上げる価値があること、(3) 記事執筆にあたって十分な文献資料が利用できること、の三点を満たす必要がある。すでに多くの歴史的文化財が記事化されている中で、未執筆のテーマを見つけることは容易ではなく、また興味深い対象であっても十分な出典を確保できなければ執筆は困難となる。そのため、ウィキペディアタウンでは、慎重に資料を精査し、出典を明示しながら記事を作成することが求められる。

2022年度は、千代田学採択事業「自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究」と連携し、淡路公園と南明館を取り上げた。淡路公園は、関東大震災後に復興小学校として再建された淡路小学校の敷地に設けられた復興小公園を起源とし、公園の歴史を通して震災復興のプロセスを学ぶ機会を提供した。一方、南明館は、明治から大正にかけて神田小川町に存在した勧工場であり、その前身である洽集館が明治25年の神田の大火で焼失した後に再建された。神田地区は繰り返し大火の被害を受けており、この事例を通して地域の火災の歴史を掘り下げることを目的とした。

2023年度には、2022年度の成果を発展させ、神田の大火そのものに焦点を当てたワークショップを実施した。これは前年に取り上げた南明館とも関係が深く、地域の防災史の視点から新たな知見を加える狙いがあった。

2024年度は、さらに神田の大火に関連する二つのトピック、「東明館」と「文房堂」に焦点を当てたワークショップを実施した。東明館は、南明館と並び神保町地区で大きな存在感を持っていた勧工場であり、明治から昭和初期にかけての商業文化を象徴する施設であった。一方、文房堂は日本における画材販売の先駆けとなる店舗であり、大火の被害を受けながらも営業を続け、現在まで存続している。これらの施設を取り上げることで、神田地区の火災の歴史と、その後の

復興の歩みについてより多角的に考察することを目指した。

本報告では、2024 1月に実施したウィキペディアタウンの企画・運営の過程、実際のワークショップの様子、そして得られた成果について詳述する。

2.1

2024年度のウィキペディアタウンに向けた準備では、例年とは異なり、トピックの選定から学生スタッフが主体的に関与する形をとった。これまでは、教員の谷島が候補を挙げた上で学生スタッフが調査や記事執筆を行う流れが一般的であったが、今回は学生自身がテーマ設定を行い、現地調査と資料収集を進めながら執筆対象を絞り込むことを試みた。

トピックの選定にあたっては、2022年度以降のワークショップと同様、「災害」をキーワードとして設定した。神田地区は歴史的に繰り返す大火や震災の影響を受けており、こうした災害の痕跡をたどることで、地域の歴史や防災の視点を学ぶ機会となると考えた。

まず、学生スタッフは神保町の街を実際に歩き、歴史的建造物や地域に残る痕跡を観察しながら、災害の影響が見取れる場所を探索した。また、千代田図書館に赴き、地域の災害史に関連する文献や資料を精査することで、執筆対象として適切なトピックを絞り込んだ。その結果、最終的に「文房堂」「東明館」「駿河台図書館」の三件が候補として挙げられた。

文房堂については、関東大震災や神田の大火の被害を受けながらも営業を継続し、現在まで存続している点に着目した。学生スタッフが文房堂に直接コンタクトを取り、公式ウェブサイトの歴史紹介の根拠となっている資料について問い合わせたところ、所蔵資料の一部を教えてもらうことができた。さらに、千代田図書館で関連資料を調査し、文房堂の災害からの復興に関する記録を収集した。

駿河台図書館については、関東大震災後の復興過程に関する記録が比較的多く残っていたことから、災害との関連性の観点で注目された。千代田図書館が作成した駿河台図書館のパンフレットを手がかりに、図書館スタッフに関連資料の所在について助言を求めた。また、過去の図書館年報や建築関係の記録を調査し、駿河台図書館の創設経緯や震災後の再建プロセスについての情報を収集した。

東明館については、2022年度に南明館を扱った際に収集した資料を活用しながら、国立国会図書館のデジタルコレクションや明治・大正期の新聞記事を調査することで、より詳細な情報を収集した。特に、神田の大火による被害状況やその後の再建の過程、当時の商業環境との関係についての記述を探し、神田地区における勸工場の歴史的な位置づけを明らかにすることを目指した。



図 2.2.1 文房堂壁面 1 (『神田写真集』タウン誌"神田っ子"十二人の仲間 編)

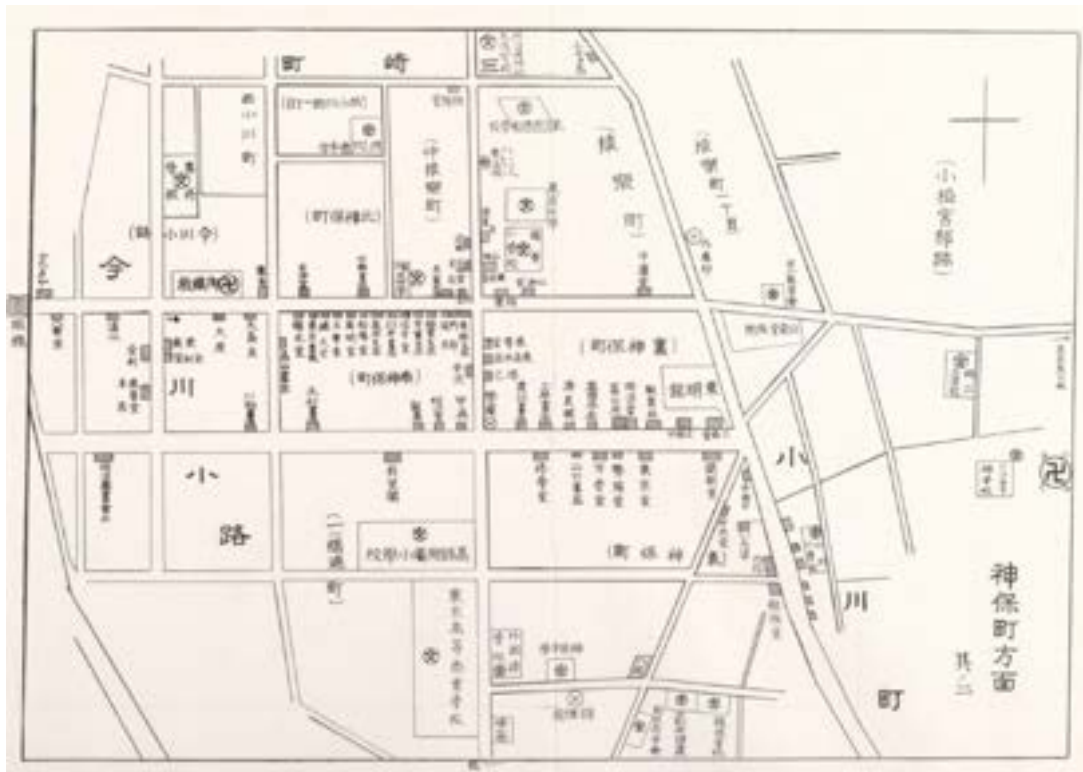


図 2.1.2 中央右に東明館が記載（神田古書籍商史編纂会編『稿本神田古書籍商史：年表』）

今回の資料調査では、千代田図書館を中心に、必要に応じて日比谷図書文化館や国立国会図書館の所蔵資料も活用した。特に、日比谷図書文化館の特別研究室に保存されている古書や、国立国会図書館デジタルコレクション内の明治期の新聞記事は、各施設の歴史を詳しく掘り下げる上で貴重な情報源となった。

これらの調査を経て、最終的に 2024 年度のウィキペディアタウンでは、「文房堂」と「東明館」を執筆対象とすることを決定した。駿河台図書館についても一定の資料は集まったが、既存の研究や記録が十分に整理されており、ウィキペディアに新規記事として追加するための独立性の面でやや課題があったため、今回は見送る形となった。収集した資料リストの一部を本章末尾に掲載する。

2.2 広報と本番準備

資料調査と並行して、ワークショップの広報と本番準備を進めた。広報については、イベント管理プラットフォームの Peatix を活用し、開催概要や趣旨を公開した。広報開始がワークショップの約 1 か月前とやや遅くなったものの、最終的に 12 名の参加者が集まった。

街歩きのルート選定については、今年度は教員が関与せず、学生スタッフだけで企画を行った。まず、執筆対象となるトピックとの関連を重視しながら、神保町・神田地区の歴史や災害の痕跡をたどるルートを検討した。加えて、参加者が無理なく歩ける範囲で、地域の歴史的背景を体感できるように考慮した結果、以下のルートを策定した。

1. ワorkshop会場（始点）

2. 甲武鉄道飯田町駅（中央線の前身）
3. 飯田町周辺の歴史的建造物
4. 九段勧業場（かつての商業施設）
5. 東明館（今回の執筆対象の一つ）
6. 文房堂（今回の執筆対象の一つ・終点）

このルート策定のため、学生スタッフは現地を実際に歩き、各地点の歴史的意義や災害との関連を調査した。例えば、甲武鉄道飯田町駅は明治期の都市開発と関東大震災後の復興と密接に関わる地点であり、九段勧業場や東明館は、かつての商業施設として神田の大火などの影響を受けながらも地域の経済活動に貢献した歴史を持つ。また、文房堂は震災による被害を受けつつも再建され、現在まで存続している点が今回のテーマに合致すると考えられた。



街歩きの準備として、各地点の歴史的背景をまとめた資料を作成し、当日はガイド役の学生が解説できるようにした。文房堂については、事前に学生スタッフが公式サイトの情報をもとに、実際に店舗を訪れて追加の情報を収集した。東明館については、国会図書館のデジタルアーカイブや明治・大正期の新聞記事を活用し、当時の建築様式や利用実態を整理した。

また、ワークショップの円滑な運営のため、当日の役割分担も事前に決定した。受付・案内係、街歩きのガイド役、ウィキペディア編集サポート係の3つの役割を設定し、各担当が準備を進めた。こうした広報・準備を経て、ワークショップ本番ではスムーズな進行が可能となった。

2.3 ウィキペディアタウン当日

ワークショップ当日は、開始1時間前にスタッフが集合し、会場設営と参加者の受付を行った。準備段階で机や椅子の配置を整え、当日使用する資料を並べ、Wi-Fi環境やプロジェクターの動作確認も行った。定刻になると参加者が続々と集まり、受付では参加者リストを確認しながら資料を配布した。

今回のワークショップでは、ウィキペディア編集の経験を持つ参加者と、初めて編集を行う参加者がバランスよく混在していた。以前のウィキペディアタウンに参加したことのある参加者もいたが、日常的に記事執筆をしている参加者は1名のみで、大半の参加者は、過去に編集経験があっても詳細は覚えていないというレベルであった。そのため、初めての参加者でもスムーズに進められるよう、進行の各段階で十分な説明を行うことを意識した。

○ 当日のタイムテーブル

10:00 - 10:15 受付

10:15 - 10:50 イベント趣旨説明およびウィキペディアの編集についての解説

10:50 - 12:00 フィールドリサーチ／記事用の写真撮影

12:00 - 13:00 昼食休憩

13:00 - 15:30 記事執筆

15:30 - 16:00 記事講評／振り返り

16:00 解散

オリエンテーションと趣旨説明

ワークショップは定刻の 10 時に開始し、冒頭ではファシリテーターの Araisyohei 氏によるオリエンテーションが行われた。その後、今回の執筆対象である「文房堂」と「東明館」について、学生スタッフが説明を担当した。事前調査で得られた情報をもとに、両施設の歴史的背景、災害との関わり、現在の状況について簡潔に解説し、参加者が執筆する記事の全体像を把握できるようにした。

続いて、ウィキペディアの編集についての基本的な説明が行われた。ウィキペディアの執筆に際しては、出典を明示することが必須であること、著作権に関するルールを守る必要があること、記事の中立性を確保することが求められることなど、編集上の重要なポイントが紹介された。初心者向けの解説として、実際のウィキペディアの記事を例に挙げながら、構成の作り方や出典の記載方法について説明が行われた。

街歩き

10 時 50 分からは、ワークショップの重要な要素のひとつである街歩きを実施した。今回のルートは、事前に学生スタッフが主体となって選定したものであり、当日も中心的な役割を果たした学生がガイドを務めた。

各地点では、ガイド役の学生が事前に準備した資料を基に解説を行い、参加者は時折立ち止まりながら話に耳を傾けた。歴史的建造物や神田地区の商業施設の変遷についての説明が加えられ、参加者が実際の風景を見ながら、過去の災害の痕跡や復興の過程を学べるよう工夫された。



図 2.1.4 「東明館前通りの図」(『東京名所図会 神田区之部』)

文房堂では、現在の店舗の景観がどのように維持されているのかについて議論が交わされ、また店舗の外観や店内の特徴を撮影する時間が設けられた。約 1 時間の街歩きを終えた後、参加者は各自昼食を取り、13時に再集合した。

記事執筆

午後の作業では、まずチーム分けを行った。ウィキペディアの編集経験が豊富な参加者、過去に少し編集したことがある参加者、今回初めて編集する参加者がバランスよく配置されるよう調整した。

チーム分けの後、ファシリテーターが記事執筆の準備としてミニワークショップを実施した。このワークショップでは、与えられた資料をもとに、どのように重要な情報を手分けして抽出し、それらを集約して文章を構成するかの練習を行った。参加者同士で意見を交わしながら、情報の取捨選択や要約の仕方を学んだ。

本格的な執筆作業に入ると、まず資料の読み込みを行い、その後記事の構成を考えた。ホワイトボードに情報を整理しながら、どの順序で内容をまとめるか議論が進められた。その後、執筆

図 2.1.5 開業当初の東明館の規模がわかる資料 (東京市役所編『東京市統計年表』)

担当を決定し、それぞれの担当者が文章を作成し始めた。

ウィキペディアタウンの執筆作業は、後半になるほど加速していく。作業が進むにつれ、参加者たちの集中度が高まり、会場内にはキーボードを打つ音が響くようになった。途中で、スタッフが適宜資料を提供し、参加者が参考文献を確認しながら執筆を進められるようサポートした。

最終段階では、記事の統合作業が行われ、編集競合を避けるために順番に投稿作業を進めた。最後に、撮影した写真をウィキメディア・コモンズにアップロードし、記事内に反映させた。出典情報の整理にも時間を要したが、ファシリテーターのアドバイスを受けながら、適切なフォーマットで出典を追加していった。

講評と振り返り

予定時刻をやや過ぎた 15 時 30 分頃から、講評が行われた。各チームから代表者が選ばれ、作成した記事の構成や編集の過程について説明を行った。どちらのチームも、情報の整理が適切に行われ、出典の精度も高いバランスの良い記事が完成していた。

ファシリテーターからは、「限られた時間の中で、情報を整理し、適切な構成にまとめられた点が評価できる」との講評があった。一方で、「歴史的背景の文脈をもう少し詳しく記述することで、記事の質がさらに向上する余地がある」との指摘もあり、今後の課題として残った。

ワークショップの最後には、参加者同士で感想を共有し、次回以降の課題や改善点について議論が交わされた。今回のウィキペディアタウンを通じて、単なる記事執筆にとどまらず、地域の歴史を学び、伝える実践的な機会となったことが確認された。

本章の最後に、当日執筆された記事の概要を掲載する。次章では、ワークショップを通じて得られた成果と今後の展望について詳述する。

3 まとめ

本ワークショップでは、神田・神保町地域の災害と復興をテーマに、「文房堂」と「東明館」の2つのトピックを取り上げ、ウィキペディアの記事執筆を通じて歴史的背景を掘り下げた。特に今年度は、例年と異なり、学生スタッフが主体的にトピックの選定や街歩きのルート策定を行った点が特徴的であった。学生たちは現地調査と図書館での資料収集を重ねながら、独自の視点でテーマを掘り下げ、執筆対象の決定に至った。

ワークショップ当日は、午前中に街歩きを実施し、執筆対象の周辺環境や関連施設を実際に訪れることで、地域の歴史や災害の痕跡を体感しながら理解を深めた。午後の執筆作業では、ファシリテーターによるミニワークショップを通じて、情報整理の方法を学びながら、参加者同士が



図 2.1.6 文房堂創設者池田治郎吉についての記事（桑原萍水編『神田人物誌』）

協力して記事を作成した。初心者から経験者までバランスの取れたチーム編成となり、それぞれの知識やスキルを活かしながら作業を進めることができた。最終的には、どちらのチームもバランスの良い記事を完成させ、ウィキペディアに公開することができた。

本ワークショップを通じて得られた成果は、単なる記事執筆にとどまらない。まず、歴史的な出来事や施設について学びながら、その情報を整理し、発信するという実践的な学びの場となった。参加者は、単に「知識を得る」だけではなく、「知識を再構成し、伝える」プロセスを経験することで、より主体的に歴史に関わる機会を得た。また、災害と復興というテーマを通じて、地域の過去を振り返るだけでなく、現在の都市環境における防災の視点を考える契機ともなった。

さらに、ウィキペディアというオープンな知識基盤に情報を加えることで、個々の学びが社会的な価値を持つ形で共有された点も重要である。参加者が執筆した記事は今後、多くの人に参照されることになり、地域の歴史を伝える新たな情報資源として機能する。加えて、ウィキペディアの編集プロセスを理解することで、参加者自身が情報の信頼性や出典の重要性についてより深い意識を持つことにもつながった。

一方で、今後の課題としては、記事の質をさらに高めるための工夫が挙げられる。特に、歴史的背景の記述を充実させ、関係する出来事とのつながりをより明確に示すことが求められる。また、出典の確保や資料調査の段階で、より多様な視点から情報を収集し、記事に反映させることも課題として残った。

ウィキペディアタウンは、単なる執筆イベントではなく、歴史を学び、知識を社会に還元する場として大きな意義を持つ。今回のワークショップの成果を踏まえ、今後も地域の歴史と知識の発信を継続し、より多くの人々が歴史的情報にアクセスできる環境を作り上げていくことが求められる。次年度以降も、本ワークショップの経験を活かし、さらなる発展を目指したい。

4 学生スタッフ振り返り

本報告書の締めくくりに、プロジェクトを支えてくれた学生スタッフ二名による振り返りを紹介して本稿を閉じる。

相場健（二松学舎大学文学部都市文化デザイン学科 谷島ゼミ4年）

本年度のウィキペディアタウンでは『東明館』と『文房堂』をテーマにワークショップを開催しました。私は午前のプログラムである街歩きのルートプランと午後の執筆プログラムで扱う『東明館』の資料集めを担当しました。ワークショップで行った街歩きは午後のプログラムへの導入として上手く機能しました。この街歩きは資料を集めている最中に現代の繋がりとして「路面電車」を発見し、当時の線路をなぞることで今回のテーマを深めることはできると考え計画しました。導入としては機能したものの、道中の空白時間を活用できず参加者同士のコミュニケーションに委ねるかたちになってしまいました。一方、東明館の資料集めでは十分な資料量を用意しリスト化することができましたが、参加者に執筆の根幹になる資料を誘導できなかった点が反省として残りました。今回のチーム運営は11月に開催した共同展示会での反省点活かし行いまし

た。スケジュール自体がタイトであったものの進行管理に関してはギリギリながらもある程度計画通りに進行できたと考えています。要所で計画に変更はあったものの時間管理はできており、作業の質の低下を引き起こすことはありませんでした。総括として、ワークショップ当日の質を上げる課題は残りますが、ワークショップ自体は問題なく開催することができました。

竹村優希（二松学舎大学文学部都市文化デザイン学科 谷島ゼミ4年）

今回卒業制作としてウィキペディアタウン in 神保町 Vol.2 という私も主体となってプロジェクトの準備を行うことは有意義でした。記事にする場所の資料集めを自らの手で行うことで、普段何気なく見ている記事がどうなりたっているのかを考える機会となりました。書くためのしつかりとした出典元、一つの記事を書くことに多くの情報が必要だと調べて改めて感じました。プロジェクトでは当日に資料を見てウィキペディアの記事を書いてもらうことになりましたが、記事を完成させることができたので一安心でした。当日の最初に簡単な書くためのワークを行ったことで資料からの情報の抜き出し方や基本的な作業の共有ができたこと、経験者がいたおかげで作業がスムーズに進み成功できたと感じています。またこのプロジェクト後に先生を含めKPT(Keep Problem Try)の振り返りを行うことで、スケジュールや準備、当日の動きなどの改善点は多くみつけることができました。同時にどうすればいいかも考えることができたので来年の改善点として伝えます。

今回のプロジェクトを通して、ウィキペディアに対するイメージが変わったのもそうですが、プロジェクトの進行に関われたということがとても良い経験になりました。これまで主体となってプロジェクトを進めるということはなかったため、初めての経験で課題やそれに対する改善点を考える良い機会になりました。このプロジェクトはこれからも続くため後輩に改善点を伝えよりよくしつつ、私もこの経験を活かしていこうと思います。

※参考資料の一部

トピック	資料名	作者	発行年数	発行元
文房堂	大正大震災被害及火害之研究	宮崎官財局編	1925	洪洋社
文房堂	設備年鑑 第7巻1970年版		1970	学芸社
文房堂	中也と中野と中央線(中野区ゆかりの著作者紹介展示 中野区立中央図書館)		2019	中野区立中央図書館
文房堂	金四郎三代記:谷中人物講話	浅尾丁策	1986.7	芸術新聞社
文房堂	中央大学(大学シリーズ)		1971	毎日新聞社
文房堂	神田写真集	タウン誌「神田っ子」+	1982.10	久保金司
文房堂	雑やす秘訣・貯める秘訣(知的生きかた文庫)	富子勝久	1987.1	三笠書房
文房堂	日経研月報 2月(260)		2000	日本経済研究所
文房堂	神田人物誌	桑原洋水 編	1916	神田公論社
文房堂	帝國現代編撰史:御即位礼記念	時代研究会 編	1918	時代研究会出版部
文房堂	第52回 株式会社文房堂(ふんぼうどう)		2020 2.5	神田学会
文房堂	千代田区歴史まちづくり重要物件		2003(平成15)年6月	
文房堂	文房堂発売品目録		1914	文房堂
文房堂	実業の日本27(23)		1924	実業之日本社
文房堂	商店界 13(3)		1933	誠文堂新光社

図 2.1.7 東明館に関する資料(一部)

東明館	神保町が好きだ! 第1-3号	八木社一	2019.10	本の街・神保町を元気にする会
東明館	東京路上雑見1(墨田・本郷・根津・千駄木・神田)	林晴信	1987.7	平凡社
東明館	東京市統計年表	東京市役所編	1903	
東明館	新編千代田区史	東京都千代田区	1998	東京都千代田区
東明館	明治のショッピングセンター跡工場	田中政治	2009	田中経営研究所
東明館	日本皮革職工人名録	浅利新	1910-1911	日本皮革時報社
東明館	東京地名案内:いろは別	村田輝次郎	1908	映成社
東明館	漢訳東京指南	村田春江	1906	俳文舎
東明館	豊太郎	橘隆友	1898	右田書店
東明館	結てたる恋:家庭小説	草の人	1907	大学館
東明館	最新東京案内記 春の巻	東都沿革調査会	1898	教育舎
東明館	東京写真帖	博文館	1914	
東明館	英語受験準備 問題之部	花輪虎太郎	1909	鳳山房
東明館	東京遊学案内 上編 第13巻	少年園	1898	
東明館	東京案内	森集書堂編輯部 編	1909	森集書堂
東明館	市街地案内	山崎謙三	1910	西江社

図 2.1.8 文房堂に関する資料(一部)

第2節 疑似的帰宅困難者体験を通じた防災教育に関する成果と課題

伊藤 マモル（法政大学 法学部）

1 緒言

近年、大規模自然災害の頻発化・激甚化は、社会の脆弱性を露呈させ、個人の生命、財産、そして地域社会の存続そのものを脅かしている。特に都市部においては、災害発生直後の交通機関の麻痺によって多数の帰宅困難者が発生し、混乱や二次災害のリスクを高めることが懸念される。このような状況下において、地域社会の一員として、また将来を担う人材として、大学生が災害時に適切な行動をとり、主体的に地域社会に貢献できる能力を育成することは、喫緊の課題であると言える。

法政大学市ヶ谷キャンパスは、東京都の「地区内残留地区」に指定されており、千代田区と締結した防災協定に基づき、地域住民や一般の一時帰宅困難者を受け入れる役割を担っている。しかし、予測困難な事態が多発する災害時において、大学がその役割を十分に果たすためには、ハード面の整備に加えて、ソフト面、すなわち教職員や学生といった構成員の防災意識の向上と、実践的な対応能力の育成が不可欠である。さらに重要なことは、災害は誰にでも起こりうる、つまり学生自身も被災者となりうるという視点を持つことである。

こうした背景を踏まえ、法政大学では、2020年度より「課題解決型フィールドワーク」を開講し、大規模自然災害発生時における帰宅困難者支援をテーマに、課題解決型学習に取り組んできた。2024年度からは、社会連携フィールドワーク（ベーシック）に科目名が変更された。本授業では、単に知識を習得するだけでなく、疑似帰宅困難者体験（宿泊や事前の知識確認、宿泊体験、EV車を用いた調理実習、ロールプレイング、KUGといった活動を含む）を中心とした体験型学習を取り入れることで、学生が災害時における自身の安全確保と、他者への貢献という両面から防災について学ぶことを目指している。



ロールプレイング① 事前相談（帰宅困難者受付係役：屋外班と校舎内班に分かれて）



ロールプレイング②（校舎内への一時避難者の受入れ）／受付・誘導係（赤のビブス着用者）



ロールプレイング③ 体育館前（屋外）での一時避難者の受入れ・誘導



消灯後、教室での就寝状況



AEDを用いた救命救急実習



電気自動車（協力：日産自動車）からの給電による調理実習（調理指導：東京家政学院大学・酒井セミ）

この授業の根幹にあるのは、知識の詰め込み型教育からの脱却と、学生が主体的に学び、行動する姿勢を育むことにある。過去の授業では、例えば、災害時にどのような情報が重要になるのか、どのような行動をとることが適切なのか、といった具体的な問題に対して、学生自身が考え、議論し、解決策を探るプロセスを重視してきた。また、過去の授業の成果を検証した結果、学生は講義や演習を通して災害に関する知識を深め、防災意識を高めるだけでなく、他者と協力しながら課題を解決する能力や、共感性といった人間性も育まれていることが示唆されている。さらに、本授業の経験が、卒業後の地域社会における防災活動への参加や、災害関連の仕事に就くといった、具体的な行動につながる可能性も示唆されている。

本研究では、単に知識の習得だけでなく、実践的なスキルの習得、共感性や倫理観の醸成、地域社会への貢献意欲の向上といった、多角的な視点からプログラムの効果を評価することで、大学生に対する防災教育のあり方に関する新たな知見を提供することを目指す。特に、本学が位置する千代田区という地域特性を踏まえ、大学が地域社会の一員として、災害時に果たすべき役割を明確化し、そのための具体的な教育プログラムを提案することを目指す。

2 目的

本研究は、大学生を対象とした社会連携型防災教育プログラムが、大規模自然災害発生時またはその後に、学生ボランティアとして地域社会に貢献する意欲と能力を育成するかどうかを検証する。具体的には、疑似帰宅困難者体験を中心としたプログラムが、学生の防災意識、知識、実践的な行動力、および共感性や倫理観といった自己認識能力に与える影響を評価する。アンケート調査結果を分析することで、本プログラムが学生ボランティア育成に果たす役割を明らかにし、今後の防災教育のあり方に関する示唆を得ることを目的とする。

3 方法

1) 調査対象

2024年度に法政大学市ヶ谷キャンパスにおいて開講された社会連携フィールドワーク・セッション（以下、PBLと略す）を履修した学生55名を対象とした。PBLは、大妻女子大学・大妻女子大学短期大学部、共立女子大学・共立女子短期大学、東京家政学院大学、二松学舎大学、法政大学、専修大学から成る千代田区内近接大学の高等教育連携強化コンソーシアム（以下、千代田コンソ大学と略す）の単位互換科目となっており、履修者55名の内訳は、共立女子大学1名、大妻女子大学1名、法政大学53名であった。

2) データ収集

本研究では、以下の三つのセッションに分けて授業の前後でデータの収集を実施した。

(1) 授業後に実施した設問のうち、授業を受ける前の認識に関する質問として、以下の1~4を設定した。回答は、「はい」、「いいえ」、「どちらでもない」から1つ選ばせた。

1: この授業を受ける前に、法政大学・大妻女子大学・共立女子大学・東京家政学院大学・二松学舎大学・専修大学などの千代田コンソ大学が、千代田区における一時帰宅困難者の受け入れ施設であることを知っていましたか？

2:この授業を受ける前に、一般の帰宅困難者のための備蓄品が法政大学市ヶ谷キャンパス内や、千代田コンソの各大学のキャンパス内に保管されていることを知っていましたか？

3:この授業を受ける前に、帰宅困難となった学生のための備蓄品が、千代田コンソ大学の各キャンパス内に保管されていることを知っていましたか？

4:千代田コンソ大学のキャンパス内に保管されている備蓄品倉庫の場所の所在を、各大学の全学生が知っておくべきだと思いますか？

(2) 授業を受けた後の大規模自然災害に関する意識や行動の変容に関する質問として、以下の5~18を設定した。5、7~16、および18の回答は、「全くそう思わない」を最下位に、最上位を「強くそう思う」とした1~5点の範囲で、自分の気持ちに最も近い点数を1つ選ばせた。6および17は自由に記述させた。

5:この授業を受ける前と比べて、災害時に大学内で落ち着いて行動する、あるいは滞留することができるようになったと思いますか？

6:「5」の理由を自由に書いてください。

7:この授業を受けたことで、帰宅困難者支援が必要となった場合、千代田コンソ大学の各々の災害ボランティア学生として協力できるようになったと思いますか？

8:大学の防災対策や帰宅困難者受け入れ施設の運営に関する問題の解決に本授業は役立つと思いますか。

9:あなたは千代田コンソの各大学の帰宅困難者対策に取り組む教職員や学生にとって、KUGは有意義な教材だと思いましたか？

10:帰宅困難者施設運営ゲーム(以下、KUGと略す)を千代田コンソ大学の教職員や学生に薦めたいと思いますか？

11:災害時に学生ボランティアとして参加できますか？

12:避難所における健康の維持(ストレスや睡眠など)について、その興味や関心は高まりましたか？

13:避難所での栄養や食事(調理方法や備蓄品など)について、その興味や関心が高まりましたか？

14:災害や防災に関して、さらに学ぶ意欲が強まりましたか？

15:この授業で学んだことを家族や友人と共有しようと思いますか？(あるいは、共有しましたか?)。

16:この授業を受けて、外出時の持ち物が変わりましたか？

17:持ち歩くようになった物は何ですか？

18:災害や防災に関する教養科目があればさらに履修して学びたいと思いますか？

(3) 授業の前後に行ったアンケートにおいて、授業への履修動機、履修者の防災意識、知識、行動意欲、自己認識能力に関する自己評価および授業内容に関する感想や意見、今後の展望などの回答を収集した。授業の前後で実施した設問は、「次の力(チカラ)について、あなたは現在のどの程度持っていると思いますか。」であり、以下の①~⑫について、最もあてはまる気持ちとして、「まったくない」、「あまりない」、「どちらとも言えない」、「ややある」、「十分にあり」から1

つ選ばせた。

- ① 物事に進んで取り組む力
- ② 他人に働きかけ巻き込む力
- ③ 目的を設定し確実に行動する力
- ④ 現状を分析し目的や課題を明らかにする力
- ⑤ 課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力
- ⑥ 新しい価値を生み出す力
- ⑦ 自分の意見をわかりやすく伝える力
- ⑧ 相手の意見を丁寧に聴く力
- ⑨ 意見の違いや立場の違いを理解する力
- ⑩ 自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
- ⑪ 社会のルールや人との約束を守る力
- ⑫ ストレスの発生源に対応する力

3) データ分析

収集した回答の分布状況をグラフに可視化するとともに、アンケートの内容を質的な定性分析を行った。授業の前後で実施した①～⑫については、回答数および割合(%)を授業前・授業後で比較し、特に、授業後に肯定的な回答(「十分にある」「ややある」)が増加した項目に着目し、学生ボランティアとして活動するために重要な自己認識能力との関連性を考察した。

4) 倫理的配慮

本研究の実施にあたっては、以下の倫理的配慮を行った。

履修者に対して、研究の目的、方法、および個人情報の取り扱いについて、口頭および書面で丁寧に説明し、履修者の自由意思による同意を得るとともに承諾書を受取った。個人情報の保護に関しては、収集した個人情報は厳重に管理し、匿名性の確保し、分析結果を公表する際は、個人が特定されないよう配慮するとともに、研究目的以外には一切使用しないことを十分に説明し、同意を得た。また、アンケートの回答は任意であり、いつでも自由に辞退できることを保証した。

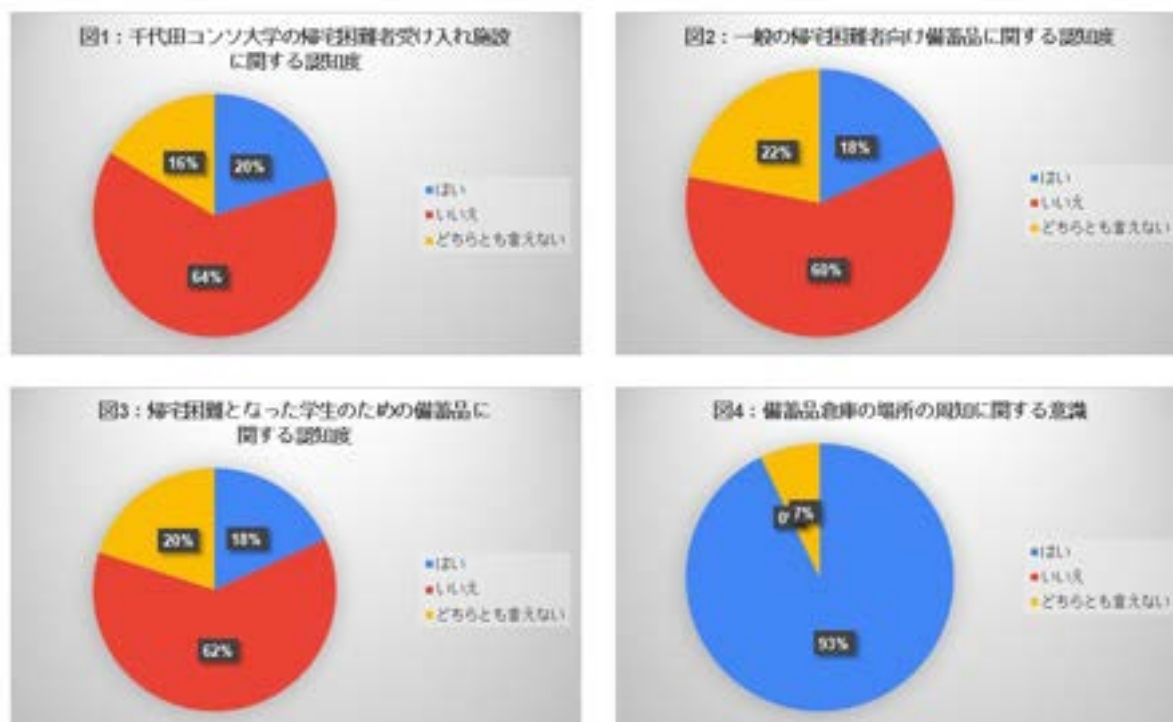
4 結果および考察

PBLには、55名の研究対象者以外に、聴講参加した専修大学ボランティアサークル所属学生5名(宿泊体験を除くプログラムに参加)、高大連携プログラムに参加した高校生10名(KUGのみ参加)、東京家政学院大学酒井ゼミ生8名(電気自動車を用いた屋外調理実習のみに参加)の計23名も参加していたが、アンケート対象とはしなかった。

1) 授業を受ける前の認識

質問1～4の回答結果を図1～4に示した。

図1の「千代田コンソ大学の帰宅困難者受け入れ施設としての認知度」では、千代田コンソ大学が帰宅困難者の受け入れ施設であることを知っていた学生はわずか20.0%に留まった。63.6%が



の学生が「いいえ」と回答し、16.4%が「どちらとも言えない」と回答していることから、その役割の認知度が低いことが明らかになった。

図2の「一般の帰宅困難者向け備蓄品に関する認知度」では、千代田コンソ大学のキャンパス内に一般の帰宅困難者向け備蓄品が保管されていることを知っていた学生は18.2%に過ぎず、60.0%の学生が「いいえ」、21.8%の学生が「どちらとも言えない」と回答した。この結果は、大学が帰宅困難者支援施設としての役割を担っているにも関わらず、学生への周知が十分ではないことを示唆している。

図3の「帰宅困難となった学生のための備蓄品に関する認知度」では、帰宅困難となった学生のための備蓄品が千代田コンソ大学のキャンパス内に保管されていることを知っていた学生は18.2%であり、61.8%の学生が「いいえ」、20.0%の学生が「どちらとも言えない」と回答した。この結果は、図2と同様な問題を示唆している。

図4の「備蓄品倉庫の場所の周知に関する意識」では、千代田コンソ大学のキャンパス内に保管されている備蓄品倉庫の場所の所在を、各大学の全学生が知っておくべきであると92.7%の学生が考えていることが明らかになった。「いいえ」と回答した学生は0人であり、「どちらとも言えない」と回答した学生も7.3%に留まった。この結果は、多くの学生が備蓄品倉庫の場所を周知することの重要性を認識していることを示している。

以上の結果から、学生が大学を帰宅困難者の受け入れ施設として認識し、備蓄品の存在や保管場所を把握させることの重要性が示された。大学が避難場所として機能することを理解すること

で、学生は主体的に行動し、ボランティア活動への意識が高まる。備蓄品の存在を認識することで、大学職員や他のボランティアとの連携が円滑になり、迅速かつ適切な物資提供が可能となり、避難所運営の効率化にも貢献できる。また、学生自身が被災者となる可能性を踏まえると、備蓄品が確保されていることを知ることで不安が軽減し、ボランティアとして、一般帰宅困難者への支援意欲も高まり、適切な情報提供等の支援の質を向上させる可能性が期待される。大学の防災機能を学生が理解し、備蓄品の管理や活用について学ぶことが、学生ボランティア育成において重要であることが示された。

2) 授業を受けた後の大規模自然災害に関する意識や行動の変容

質問5は、7～16、および18の回答を、図5～16に示した。質問6の回答は、図5と合わせて考察した。質問17は、図17に示した。

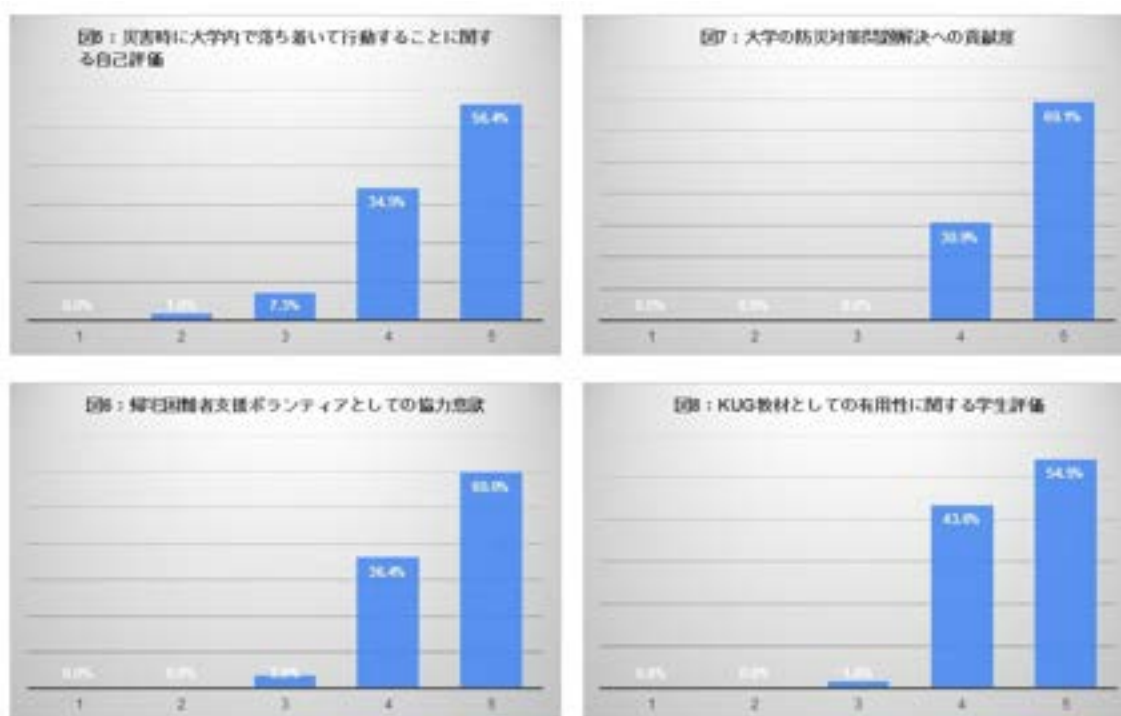


図5の「災害時に大学内で落ち着いて行動することに関する自己評価」では、34.5%の学生が「4」、56.4%の学生が「5」と回答した。これらの結果から、授業を受けたことで、90.9%もの学生が災害時に大学内で落ち着いて行動できるようになったと感じていることが推察される。さらに、表1に、この授業を受ける前と比べて、災害時に大学内で落ち着いて行動する、あるいは滞留することができるようになった理由を示すとともに、テキストマイニングを用いて抽出された主なキーワードとその出現頻度を図17に示した。本授業の履修によって、備蓄品や大学の支援体制、提供される情報や帰宅リスクを具体的に認識することで、大学に留まることの安心感が得られる。また、Stay for Safetyの理念から、自らの安全だけでなく周囲にも配慮した行動をとる姿勢、AEDの使用や非常用トイレの使い方を実践的に学ぶことで、災害時に役立つスキルを習得できたという実感が述べられていた。このように、「授業で災害時の対応やその後どうなっていくのか詳しく学べたことによってイメージがつくようになった」という回答が見られ、具体的なイメージ

を持つことが行動に繋がる可能性を示唆している。

図6の「帰宅困難者支援ボランティアとしての協力意欲」では、回答者の96.4%が、プログラムを通して災害ボランティアとして協力できるようになったと感じている。図7の「大学の防災対策問題解決への貢献度」では、全ての学生(100%)が、本プログラムが大学の防災対策問題解決に役立つと考えており、特に7割近くが「強くそう思う」と回答している。この結果は、プログラムに対する学生の期待の高さを表している。図8の「KUG教材としての有用性」では、98.1%の学生が、KUG(千代田コンソの各大学の帰宅困難者対策に取り組む教職員や学生向けの教材)が帰宅困難者対策に取り組む人々にとって有益な教材だと考えている。

図9の「KUGの推奨意向」では、全ての学生(100%)がKUGを他者へ推奨する意向を示している。図10の「災害時における学生ボランティア参加意向」では、94.5%の学生が、本プログラムを通して災害時に学生ボランティアとして活動できるという自己評価を抱いている。図11の「避難所における健康維持への関心度」では、96.3%の学生が、本プログラムを通して避難所における健康維持への興味・関心が高まったと認識している。図12の「避難所での栄養・食事への関心度」では、94.5%の学生が、本プログラムを通して避難所での栄養や食事への興味・関心が高まったと認識している。

図13の「防災・災害に関する学習意欲」では、96.3%の学生が本プログラムを通して災害や防災への学習意欲が高まったと認識している。図14の「家族・友人との情報共有意欲」では、全ての学生(100%)が、本プログラムを通して得た知識や情報を家族や友人と共有したいと考えている。図15の「外出時の持ち物変化」では、81.8%の学生が、本プログラムを通して外出時の持ち物が変わったという自己評価を持っている。図16の「防災・災害に関する教養科目の履修意向」では、90.9%の学生が、本プログラムを受講した上で、さらに災害や防災に関する教養科目の意義を再認識した可能性が高い。

図18の「授業を終え、外出時に持ち歩くようになった物」では、災害時の衛生管理を意識した衛生用品や、精神安定にも繋がる食料品の携行が増加した可能性が高い。また、情報源確保のためのモバイルバッテリーなど、災害情報へのアクセスを重視する傾向もみられた。一方で、意識は高まったものの具体的な準備行動に移せていない学生も存在し、実践的な訓練や行動を促すインセンティブの必要性が示唆された。

以上のことから、これらの防災教育プログラムが大学生の意識と行動に与える影響を多角的に評価した結果から、学生は授業を通して、災害ボランティアとしての協力意欲、大学の防災対策への貢献意欲、KUG教材の有用性に対する肯定的な評価を高めた。また、災害時のボランティアへの参加の意向、避難所における健康・栄養への関心、防災学習に対する意欲も向上したと考えられる。さらに、外出時の持ち物の変化や防災教育に関する教養科目の意義も認識される等の具体的な行動変容と学習意欲の向上が示唆された。研究対象とした授業内容が、防災に関する知識の伝達のみならず、学生の主体的な防災活動を促進する上で重要な役割を果たす可能性を示したと言える。

表1. 図5.災害時に大学内で落ち着いて行動することに関する自己評価における記述回答一覧（未記入者を除く回答数46名）

1	この授業を受けたことで災害時に自分には何ができるか、何をすべきかを明確に知ることができたため、落ち着いて行動できるようになったと感じたからです。
2	逃げることで伴う危険も知ったし、大学内には3日間分の備蓄品があると知ったから。また、トイレやAED等身体面についても実習をしてかなり自信がついたため。
3	1人が動くことで皆んながつられて動いてしまい、その結果二次災害が起きると知ったことで、落ち着いて行動、滞留することができると思う。
4	この授業を通して、災害が発生すると電車などの交通機関が止まってしまったり道路が通れる状態ではなかったり怪我をしてしまう恐れもあるので無理に家に帰ろうとせず、大学に来た方がいいということを学びました。また大学には学生が3日は寝泊まりできるような備蓄があると知り、焦る必要がないと学んだからです。
5	知識がついて、落ち着いて冷静に動けるようになったと思う。
6	AEDの使い方だったり、非常用のトイレの使用などここに来たお陰で学ぶことができ災害時に活かせるなど感じたことが多くあったから。
7	避難所の運営の大変さを理解したから。
8	私は今回の授業を受けるまで、帰宅困難者というものの定義すら曖昧であった。しかし、3日間の授業を通して、外出している際に災害が発生したときにどのような行動を取るべきなのか、だいぶ明確になった。大学の中に備蓄品があったり、帰宅困難者を受け入れる体制が整えられていたり、災害発生時における大学の役割を強く実感することができたと思う。
9	saty for safteyの精神を学んだから。友達や家族にこのマインドを共有したいです。
10	大学内でどのような行動を取ればいいのか学べたから。
11	対応法や過ごし方、トイレなど様々なことについて学び、実践することができたから
12	この授業を受けて、救急救命の仕方や災害時に個人としてできることなど防災についての知識を身につけることができたから
13	保存食などの物資の置いてある場所を知ったり、AEDの使い方などを認識できたので、多くの学生がそれらの事を知らないため自分は自信を持って他の学生に周知させ、迅速に行動できると感じたから
14	大学内に帰宅困難者になった設定で止まった経験や、災害時に注意すべきことややるべきことなどをしっかり学ぶことができたのが落ち着いて行動できる要因になると思います。
15	自分が落ち着いて行動して大学内に滞留すれば他の人も皆落ち着いて行動してくれらると思うから。
16	今回の授業でどのような心理状態、または行動をとると危険なのか具体的な例やお話から想像することができて同じような状況が本当に起こってしまっても今は心の準備ができていますから
17	地震が起きたらすぐに秋田県の実家になんとか帰ろうとしていたから。宇都宮辺りまで気合い歩いて仙台の友達に迎えに来てもらおうとしていた。3日ほど大学に滞留してから実行することにした。
18	いろんな講義を受けたことによって、1番皆さんが強調してたことが留まることstay for safetyであり、自分の家が20キロ圏内にはいない人は大災害が起きてから3日間は避難施設に待機してないと危ないし、それが個人にもみんなにとっても身の安心を考える上で大事なことから。
19	災害に対する興味が深まったからである。
20	やるべきことがある程度わかったから
21	災害後帰ってはいけないなどどうすればいいかが理解できたから
22	大学でどう行動するかイメージがついたから。
23	自分が実際に宿泊したからその辛さがわかった。
24	フィールドワークを通し災害時に自分には何ができ、何をすべきかをKUGや他の活動からも学んだからである。また「あなたの待機が誰かを救う」という言葉を聞き待機することでも大切なことだということ学んだから。
25	何をすればいいのかを具体的にイメージできたから
26	滞留するべき理由を理解することができたから。滞留した際のある程度の行動の仕方を体験できたから。
27	授業で災害時の対応やその後どうなっていくのか詳しく学べたことによりイメージがつくようになったから
28	授業を受ける前は、大学内でどのように行動すればよいか全く見当もつかなかったのですが、今では備蓄倉庫や千代田区コンソーシアムの内容、KUGの経験、詳細にはエシペーターの中にも備蓄品や普段いずらなところがないところやトイレ代わりになるなど、様々な災害時対策における発見があったため。
29	災害があるときはむやみに行動せず大学に留まることがよしとされており、その中で避難場所であったり、備蓄倉庫を今回知ることができたため。
30	災害時に必要となる知識や、心理面で意識すべきことを沢山学んだから
31	実際に授業を通して経験したことは忘れない出来事になり災害時に役に立つと思ったから。
32	講義を通じて災害に対する理解が深まり、自分の命を守るためにどのような行動を取るべきなのかを自分なりに考える事が出来たからである。災害時のリアルな状況や問題を疑似的に体験することで、実際に発生した場合の行動を改めるきっかけとなった。
33	災害発生時の学生に求められる行動を学ぶことができたので、パニックにはしないうと予想したから。
34	どこに備蓄品があるか知ることができ3日分の備蓄用品はしっかりとあることがわかったため。また大学内の方が安全であることが理解出来たため変に移動するよりも大学無いでどとまったほうが安全であると理解出来たから。そして携帯トイレの使い方も学べたので少しは経験があると考えるため。
35	実際に学校に泊まるという体験被災地での生活をより明確に想像できても自分に大きな影響を及ぼしました。
36	昨年と合わせ、フィールドワークを行った経験から多少落ち着けると考えた。また、滞留が自分と周りの命を守るためであると学んだため。
37	授業を受けて、自分が待機したほうが周りの安全につながることや、自分にとって必要最低限の食糧を手に入れられることがわかったから。
38	一斉帰宅によって引き起こされると予想される状態を考え、大学に残りボランティアとして活動をする方が、自身の安全にとっても身の回りの人の安全にとっても良い選択であると考えられるため、自身が率先して大学に滞留することで、少しでも一斉帰宅を抑制できればと思う。
39	授業を受けなかったら、家から離れた大学にいるよりも頑張っ歩いて帰ろうという気持ちになっていたと思う。10kmで2時間半くらいと聞いたが災害時にはたくさんの方が同じことを考えて道を歩くと考え、もっと時間がかかるのではないかと考えた。そう考えると人ごみで体力を奪われたり、雑踏事故に巻き込まれる危険を考えたりすると無理に帰宅するのではなく滞留した方が安全だと感じられたから。
40	シンポジストのstay for safetyについての講義を聞いて、大抵の人は焦ったら混乱して逃げると言う選択を取りがちだが、実際全ての人が動かなければ梨泰院の事件も大勢の人が死なずに済んだということがわかり、冷静な判断をすることが大切なのだと言うことがわかった。また、受け入れ役の人をやってみて、高齢者の方、ペット連れの方などさまざまな人を受け入れていく上で、落ち着いて判断し、滞留しないと周囲の人間のストレスが溜まり不安が高まっていくのではないかと感じた。そのため落ち着いて滞留することの大切さに気づき、以前と比べて行動が変わった。
41	災害時に知識不足が故に帰りたい気持ち一心で行動してしまったり、知らない自分だけでなく周りの危険を呼び行動を起こさかねないと感じ、今回の授業を受けて身につけることができた知識から災害時こそ冷静に行動することの重要性を知った。
42	以前は学校のどこに滞留するのかや何日分の備蓄品がどこにあるのかなど全く知りませんでした。具体的なものを知り実際に体験したことによって安心感や有事の際のイメージは格段と上がったと思います。また、学校に入れば誰かが指示して適当なところに導いてくれるだろうと考えていたところ、自分が先頭に立って物事を決めて行かなければならないことを再認識して落ち着いて行動することが大切だと思ったからです。
43	災害が起こった時まず帰らないということを第一に考えるべきだと知ったから。
44	自分自身の確かな判断をすることができるようになり、それを周りにもちきんと促すことができる知識を得ることができたから。また、それを実践できたから。
45	すぐ帰宅したいという気持ちは分かりますが、リスクをしっかりと考えること、周りにはたらきかけ避難をしっかりと促すことができる人間が少ないと思うため、自分がなろうと思ったからです。
46	シンポジストをはじめとした教授や大人の話を聞いて、災害時に帰宅する行為がどれだけ危険か知る事が出来たから。

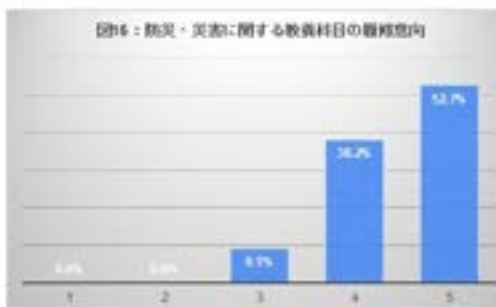
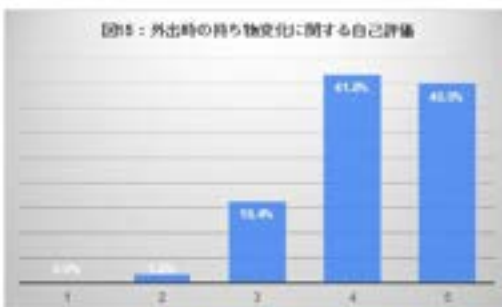
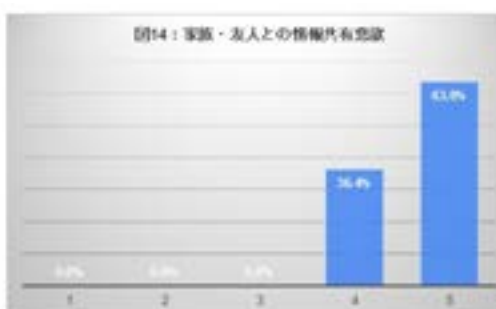
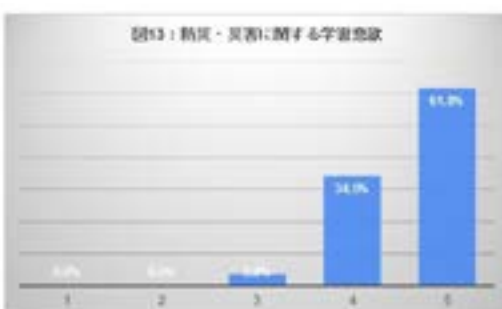
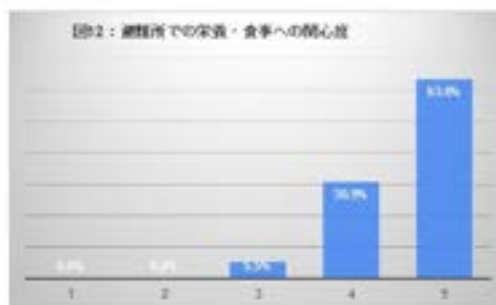
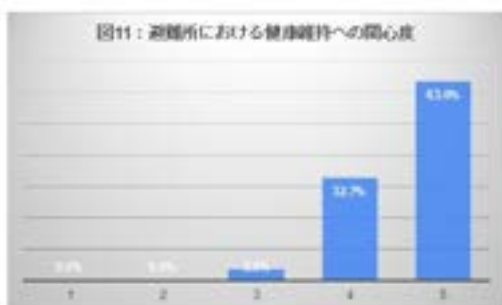
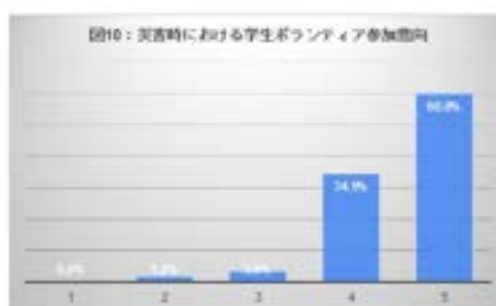
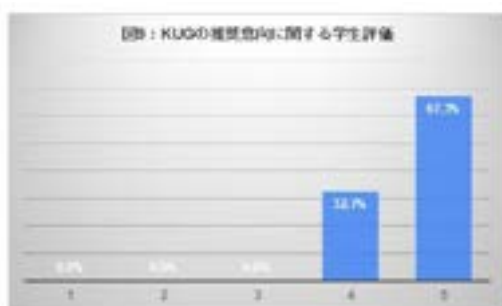


図17. 図5. 災害時に大学内で落ち着いて行動することに関する自己評価における記述回答のテキストマイニング (回答数40名)

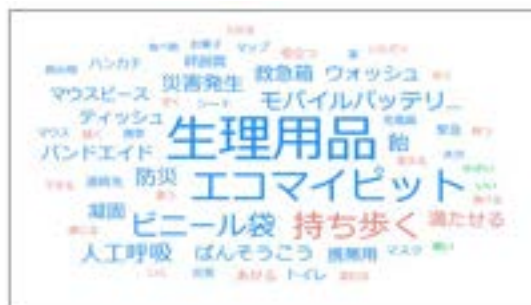


図18. 授業を終え、外出時に持ち歩くようになった物

3) 授業前後の自己認識能力

本授業が、学生の自己認識能力に与える影響を評価する目的で、「力（チカラ）」に関する自己評価に関する①～⑫の項目を授業前後で調べた結果を比較分析した（図19、図20）。その結果、以下の項目において肯定的な変化が認められた。

最も顕著な変化が見られたのは、「9.意見の違いや立場の違いを理解する力」であり、「十分にある」と回答した学生が授業前の19人から授業後には25人に増加（+6人）した。これは、KUGにおける多様な背景を持つ学生が各々との協働作業を通じて、他者の視点を理解し、尊重する能力が向上したことを示唆している。また、「10.自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力」においても、「十分にある」との回答が19人から25人に増加（+6人）しており、災害時という特殊な状況下で、自己と他者、そして社会とのつながりを意識する重要性を認識したことが伺え

図19. 授業前における自己評価による「現在の力」の認識

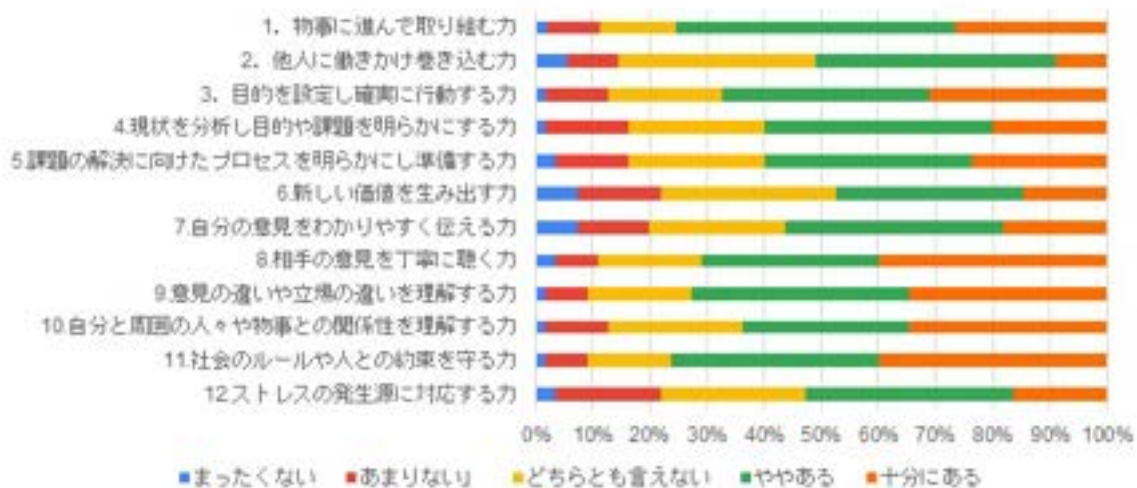
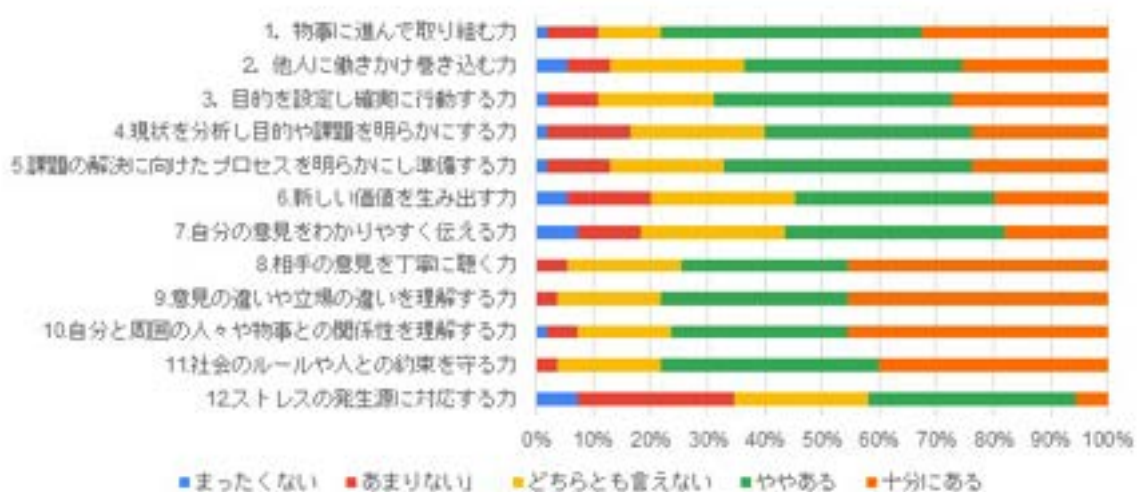


図20. 授業後における自己評価による「現在の力」の認識



る。さらに、「2.他人に働きかけ巻き込む力」に関しても、「十分にある」と回答した学生が5人から14人と大幅に増加(+9人)した。これは、災害時には個人だけでなく、周囲と協力して行動することの重要性を理解し、自ら積極的に働きかけようという意識が高まったことを示唆していると考えられる。一方、「12. ストレスの発生源に対応する力」については、「十分にある」と回答した学生が9人から3人に減少(-6人)しており、興味深い結果となった。これは、プログラムを通して災害時のストレス要因を具体的に認識したことで、自身の対応能力に対する現実的な評価が進んだ結果と考えられる。

これらの結果から、授業において実施した各防災教育プログラムは、学生の共感性、社会性、および自己評価の精度を高める上で一定の効果があつたと言える。ただし、ストレス対応能力については、安易な自己肯定感を抑制し、より客観的な視点から自己の課題を認識するという点で、今後のプログラム設計においては、具体的なストレス軽減方法や相談先の情報提供を充実させることで、課題克服に向けた意欲を喚起する必要がある。

5 結論

本授業は単なる知識の伝達にとどまらず、疑似的な帰宅困難者体験や救急救命講習、KUGなどの実践的な演習を通して、大学生が災害時に直面する困難をリアルに体験し、自ら考え、行動する力を養うことを重視した。これは、学生自身が災害への当事者意識を持ち、地域社会に貢献する意欲を高める上で不可欠である。本授業の履修により、学生が大学の災害時の役割や備蓄品の存在を理解し、ボランティア活動への意欲を高めることが期待される。授業前のアンケートでは、大学が帰宅困難者の受け入れ施設であることや、備蓄品の存在・保管場所についての認知度が低いことが明らかになった。学生は、講義や実習を通じて帰宅困難者支援や避難所運営の基本的な知識を習得し、災害時の対応を具体的にイメージできるようになったことが、自由記述の回答からも確認された。特に、備蓄品に関する講義や倉庫の見学を通じて、学生は物資の種類や管理方法を理解し、災害時に的確に対応できる能力を高めた。また、自身が被災する可能性を考慮することで、備蓄品の活用や避難行動への関心が高まり、支援活動に対する積極性が促進されることが示唆された。

本研究の成果は、千代田コンソの各大学と共有し、防災教育の改善のヒントとして各大学の防災教育の推進、ひいては災害に強い千代田区の実現にも貢献することが期待される。今後の課題として、より実践的な演習や訓練を導入し、大学教職員、地域社会、近隣企業の連携を強化することが求められる。また、学生への周知活動を強化し、備蓄品の適切な管理・活用についての理解を深め、円滑な避難所運営に寄与できる人材を育成する必要がある。さらに、大学のウェブサイトやSNSを活用した情報発信、キャンパスマップの配布、宿泊体験型の防災訓練の実施などを通じて、学生が主体的に防災活動へ関与できる環境を整備することが重要である。こうした取り組みを進めることで、災害に強い大学・地域社会の実現に貢献できると考えられる。

謝辞

本報告書の対象授業の実施にあたり、多大なご支援を賜りました法政大学総務部庶務課の小林光広課長、詳細な授業記録をご提供くださった法学部の藤岡成美准教授に深謝いたします。また、屋外調理実習に電気自動車をご提供くださった日産自動車株式会社日本事業広報渉外部の高橋雄一郎様、そして貴重なご講演をいただいた多くの先生方に心より感謝申し上げます。皆様のご協力なしには、本授業は成しえませんでした。

参考文献

- (1)伊藤マモル (2025)：学生と作る、自然災害に強い大学キャンパス—アクションカードと健康指標を用いた帰宅困難者支援システムの構築—, 加盟大学「防災・減災」 研究事例集, 日本私立大学連盟, 3.
- (2) 頼政良太 (2024)：災害ボランティアの探究—アクション・リサーチによる実践研究, 関西学院大学出版会
- (3)阪本真由美 (2024)：阪神・淡路大震災から私たちは何を学んだか, 慶應義塾大学出版会
- (4)伊藤マモル (2024)：帰宅困難者支援に関する課題解決型授業の取り組み, 自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究 (3) —地域連携を視野に入れた帰宅困難者支援施設運営ゲームの開発, 73-82.
- (5)伊藤マモル (2024)：帰宅困難者一時滞在施設の受入れに備えたアクションカードの開発, 自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究 (3) —地域連携を視野に入れた帰宅困難者支援施設運営ゲームの開発, 83-88.
- (6)伊藤マモル (2023)：模擬的な帰宅困難者一時滞在支援施設における一泊二日がストレス関連指標に及ぼす影響, 自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究 (2) —教職員及び学生を対象とした帰宅困難者支援施設運営ゲームの開発, 36-50.
- (7)伊藤マモル (2023)：法政大学において実施された学生及び教職員によるKUGの報告, 自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究 (2) —教職員及び学生を対象とした帰宅困難者支援施設運営ゲームの開発, 80-94.
- (8)伊藤マモル (2022)：学生及び職員による帰宅困難者支援施設運営ゲーム (モデル校：法政大学) の学習体験, 自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究 (1) —学生版 KUG (帰宅困難者支援施設運営ゲーム) の開発, 53-67.

第3節 大学間防災ネットワークの構築

—千代田キャンパスコンソにおける Discord 導入の試み—

谷島貫太（二松学舎大学 文学部）

1 はじめに

千代田区には多数の大学が集積しており、平時には学術・教育活動の拠点として機能しているが、大規模災害時には帰宅困難者の受け入れや物資の供給といった役割を果たすことが求められる。特に千代田区は昼間人口が多く、災害発生時には多くの学生・教職員・地域住民が避難場所を必要とするため、各大学間の迅速かつ的確な情報共有が不可欠である。

しかし、これまで千代田区内の大学間で災害時の対応に関する統一的な情報ネットワークは存在せず、各大学が個別に防災対応を進める形がとられてきた。このため、緊急時に大学間でリアルタイムの情報共有を行う仕組みが不十分であり、連携の遅れが生じるリスクが指摘されていた。たとえば、備蓄物資の相互支援や避難者の受け入れ調整を行う際に、迅速な情報交換が難しいことが課題となっていた。

こうした背景のもと、千代田キャンパスコンソの共同研究チームでは、防災ネットワークの構築を目的とした Discord サーバを立ち上げることを決定した。これは、従来のメールや電話といった手段に比べ、リアルタイムの情報共有が可能であり、迅速な対応を支援するための柔軟なプラットフォームとして期待されている。特に、本学が実施した KUG（帰宅困難者支援施設運営ゲーム）において、Discord を試験的に活用し、ワークショップの進行・記録・振り返りにおいて有効性が確認されたことが、本導入の契機となった。

本報告では、千代田キャンパスコンソの共同研究チームが設立した Discord サーバについて、その設計、運用状況、成果と課題を整理し、今後の展望を検討する。防災ネットワークの強化に向けた具体的な取り組みを示すことで、より実効性のある大学間連携のあり方を提案することを目的とする。

2 Discord サーバ設立の経緯

千代田区に立地する大学群は、災害発生時に帰宅困難者の受け入れや物資の供給といった対応を求められる。そのため、各大学間での迅速な情報共有と連携が不可欠である。しかし、従来の情報共有手段であるメールや会議、紙ベースの資料では、緊急時の即応性が乏しく、リアルタイムの情報共有が困難であるという課題があった。

加えて、これまでの大学間の防災連携は、各大学が個別に千代田区と協定を結ぶ形式が中心であり、大学同士が直接つながる公式な情報ネットワークは整備されていなかった。本

来であれば、千代田区全体の大学が統一的に活用できる防災ネットワークの構築が望ましいが、そのようなネットワークを立ち上げるには、制度設計や運営体制の整備に時間がかかるため、即座の実現は難しい状況にあった。

そこで、まずは機動力が高く、低コストで始められる情報共有手段として、Discord を活用することを決定した。Discord は、チャットベースのリアルタイム情報共有が可能であり、大学ごとにチャンネルを分けることで、各大学の独自の防災体制を維持しながら、必要な情報を効率的に共有できる点が評価された。また、KUG における試験運用でも、参加者がリアルタイムで情報を交換し、振り返りにも活用できることが確認されたため、その実績を踏まえて本格的に導入する運びとなった。

このように、本来の公式ネットワークの整備には時間がかかるため、まずは大学間の情報共有をスムーズにするための場として Discord を立ち上げ、実際の運用経験を積みながら、今後の防災ネットワークの在り方を検討していくという方針が採用された。

3 サーバ設計に際しての予備的検討

本 Discord サーバは、千代田区の大学間における防災ネットワークの基盤として構築された。しかし、公的なネットワークが未整備な現状では、制度的な整備には時間がかかるため、まずは機動力が高く、低コストで運用できる場を確保し、徐々に大学間の防災連携を形成していくことが必要である。そこで、本サーバの設計にあたっては、①緊急時の最低限の情報共有、②KUG を活用したネットワーク形成、③サーバ自体の価値付与の 3 点を軸に検討を行った。

3.1 位置づけ—緊急時の最低限の情報共有

本来であれば、千代田区内の大学間で公的な防災ネットワークが構築されることが望ましい。しかし、そうしたネットワークの整備には時間がかかるため、大災害が発生した際に各大学が即座に状況を共有し、最低限の連携をとれる体制が必要となる。

本サーバは、そのような状況を想定し、「公的なネットワークが確立する前の緊急時の情報共有」を目的として設計された。災害発生時には、各大学の被害状況、避難所の受け入れ状況、物資の供給状態をリアルタイムで共有できる場となることで、協力体制の遅れを防ぐことができる。また、自治体や防災機関との連携を視野に入れつつ、まずは大学同士の情報交換がスムーズに行われることを重視している。

3.2 活用の戦略—KUG を活用したネットワーク形成

本サーバを「緊急時のための場」とするだけでなく、KUG（帰宅困難者支援施設運営ゲーム）の実施時に活用することで、防災ネットワークの形成を促進するという戦略を採

用した。

KUG は各大学で個別に実施されることが多いが、サーバを共通の情報共有ツールとして用いることで、大学間の防災連携が自然に生まれる仕組みを作ることができる。たとえば、KUG 実施時にサーバ内でリアルタイムの議論や判断記録を共有することで、参加者が防災対応のプロセスを整理しやすくなる。また、KUG 終了後も過去の実施記録がサーバ上に蓄積されるため、次回以降の訓練や実際の災害対応に活かすことが可能となる。

このように、KUG の副産物として緩やかな防災ネットワークが形成されていく流れを意図しており、結果的に、千代田区の大学間の防災協力体制が強化されることが期待される。

3.3 サーバの価値付与—継続的な利用を促す仕組み

ネットワークの構築には、単にプラットフォームを作るだけでなく、そこに価値を見出してもらい、日常的に活用される場とすることが重要である。防災のためにサーバを作っても、利用されなければ実際の災害時に機能しない。そのため、本サーバは KUG 情報の集積と千代田区の防災関連情報の共有という 2 つの価値を付与し、継続的な利用を促す仕組みを構築することを目指している。

1. KUG に関する情報の蓄積

- 各大学の KUG 実施記録、議論内容、振り返りを蓄積し、次回以降の参考資料とする
- 改善点や新たなアイデアを共有し、KUG の質を向上させる

2. 千代田区の防災関連情報の共有

- 千代田区の防災訓練や災害対応マニュアルを集積し、必要な情報がすぐに参照できるようにする
- 各大学が主催する防災イベントや講習会の情報を共有し、参加を促す

このように、KUG と千代田区の防災情報を蓄積する場としての価値を持たせることで、参加者が日常的に活用しやすい環境を整える。これにより、平時から利用されるサーバとなり、緊急時にも自然に機能するネットワークへと発展することが期待される。

3.4 まとめ—運用実績への展開

本 Discord サーバは、緊急時の情報共有の確保、KUG を活用したネットワーク形成、そして日常的な価値の提供という 3 つの視点から設計された。特に、KUG の実施を通じて大学間の防災ネットワークが自然に形成される仕組みを意識し、サーバが単なる情報共有ツールにとどまらず、実際の防災対応に活かされる場として機能することを目指している。

しかし、こうした設計の意図が実際にどの程度機能しているのかは、実運用の中で検証する必要がある。そこで、次章では本サーバの立ち上げ後の運用状況について整理し、どのような成果が得られたのか、また運用上の課題は何かを具体的に考察する。KUG 実施時の活用状況や、大学間での情報共有の実態を振り返りながら、今後のサーバの運用方針についても検討を加えていく。

4 サーバの運用実績と課題

本 Discord サーバの運用は、KUG の実施と連動させる形で開始された。サーバの立ち上げ当初、すでに KUG を実施していた法政大学以外の、二松学舎大学、東京家政学院大学、大妻女子大学、専修大学、共立女子大学において、KUG 実施時に Discord を活用する試みが行われた。これは、KUG を通じて防災ネットワークが自然に形成されていく仕組みを実現するための、最初の具体的な運用例となった。

4.1 各大学における運用とその特徴

サーバの運用開始にあたっては、まずは使用方法の可能性を探るため、使用のフォーマットを定めず、各大学が自由に活用できる形で進めた。その結果、大学ごとにさまざまな使い方が見られた。多くの大学では、一つのチャンネルに情報を集約する運用を採用し、KUG の進行や振り返りをまとめる場として活用した。一方で、二松学舎大学と大妻女子大学では、チャンネルごとに使い方を分けるという工夫がなされていた。

- 二松学舎大学では、**「連絡用」「写真共有用」「成果振り返り用」**の3つのチャンネルを使い分け、それぞれの用途に応じた情報管理を行った。特に、写真共有用のチャンネルでは、KUG の進行中に参加者が撮影した画像を随時アップロードすることで、記録としての役割を強化する形をとった。
- 大妻女子大学では、「KUG 受け入れ方針・イベント対応」「KUG 振り返り」「補足情報」の3つのチャンネルを活用した。なかでも「KUG 振り返り」チャンネルは、KUG 終了後に各チームごとに振り返りを共有する場として運用され、ワークショップ終了後の議論をさらに発展させる可能性を示していた。従来、KUG の振り返りはその場で口頭で行われることが多かったが、このチャンネルの導入により、KUG の内容を整理し、深掘りする場としての新たな活用方法が生まれた。

このように、各大学の KUG の特性に応じた多様な運用が見られたが、特にチャンネルを細分化した事例では、情報の整理や振り返りの充実度が向上する効果が確認された。

4.2 Discord 導入による効果

Discord 導入の効果として、大きく以下の二点を挙げることができる。

(1) リアルタイムでの情報共有が可能に

これまで、他大学の KUG については事後に報告を受ける形が主であり、実施中の内容を共有する機会は限られていた。しかし、Discord を導入したことで、KUG に参加していなくてもリアルタイムで進行状況を把握できるようになった。

例えば、専修大学で KUG を実施している際、二松学舎大学の教職員がサーバ上の投稿を通じて、他大学の判断基準や対応の違いを把握することができた。また、二松学舎大学や大妻女子大学では、写真共有やチームごとの振り返りチャンネルを活用したことで、KUG の記録を参照しながら議論が可能となり、従来よりも深い振り返りが促された。

(2) KUG の振り返りの集約

大妻女子大学の「KUG 振り返り」チャンネルの運用は、特にワークショップ終了後の議論を整理し、他大学と共有する基盤として機能した。KUG の場では時間的な制約から十分な振り返りができないことも多いが、終了後にチームごとの気づきを整理し、蓄積できることは大きな利点となった。こうした試みが他大学にも波及することで、大学間の KUG の知見を横断的に活用できる可能性が生まれている。

このように、Discord の活用により、KUG のリアルタイム共有が可能になり、振り返りの集約・比較が行いやすくなったことが、導入の大きな成果として挙げられる。

4.3 運用上の課題

一方で、運用の中でいくつかの課題も浮かび上がった。

(1) 情報の整理方法

各大学が自由な形で運用を行ったため、情報が分散しやすく、特定の知見を後から参照する際に整理が必要なケースがあった。今後は、振り返りのフォーマットを統一するか、情報をタグ付けして検索しやすくする仕組みを整えることが求められる。

(2) 実際の災害時の運用の課題

KUG というシミュレーションの枠組みの中では有効に活用できたが、実際の災害発生時にどのように機能するかは未検証である。特に、通信環境の影響や、混乱の中での情報整理の課題について、今後のシミュレーションを通じて検討していく必要がある。

4.4 まとめ

本 Discord サーバの運用を通じて、KUG のリアルタイム共有、振り返りの集約、大学間の比較が可能になるといった効果が確認された。特に、KUG に参加していなくても他大学の進行状況を把握できる点や、各大学の知見を蓄積・共有する仕組みとして機能しつ

つある点は、今後の防災ネットワークの発展にとって重要な基盤となる。
一方で、情報整理の課題、実際の災害時の運用に向けた検討といった改善すべき点も明らかになった。

5 今後の展望とまとめ

本報告では、千代田キャンパスコンソの共同研究チームが防災ネットワークの基盤として設立した Discord サーバの運用とその可能性について述べてきた。KUG の実施を通じた情報共有の仕組みとして一定の成果を上げた一方で、活用のばらつきや情報整理、実災害時の運用といった課題も明らかになった。

今後の展望として、まず KUG とのさらなる統合を進め、シミュレーションの記録や振り返りを一層効果的に行う仕組みを整えることが求められる。また、大学関係者だけでなく自治体や防災団体との連携を強化し、実際の災害対応に活かせる情報基盤として発展させることも重要である。さらに、実災害時の運用テストを実施し、通信環境や情報整理の課題を検証することで、実効性の高いネットワーク構築を目指す必要がある。

本サーバの運用を通じて、大学間の防災協力体制が徐々に形成されつつある。この取り組みを継続し、サーバの活用方法を改善しながら、より強固な防災ネットワークへと発展させていくことが今後の課題である。